

メカクシティアクターズ

natsuki

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『カゲロウプロジェクト』を原作として、ストーリー化しています。

実際に書き始めたのは、2012年5月頃で、pia proにて書いていました。

そのため、設定に差異がございますので、よろしく願います。

※2014/6/8 50000アクセスありがとうございます。

※2015/1/14 65000アクセスありがとうございます。
す。

※未完。

目次

ヒビヤ編

プロローグ	チルドレンレコード	1
第零話	ロスタイムプロローグ	11
第一話	カゲロウデイズ	12
第二話	想像フォレスト	17
第三話	メカクシコード	22
第四話	コノハの世界事情	26
第五話	デッドアンドシーク前編	30
第五話	デッドアンドシーク後編	33
シントロー編		
第六話	ロスタイムメモリーI	38
第七話	夕景イエスタデイI	42
第八話	夕景イエスタデイII	44
第九話	人造エネミーI	47
第十話	透明アンサー	50
第十一話	ロスタイムメモリーII	53
最終章		
第十二話	夕景イエスタデイIII	57

ヒビヤ編

プロローグ チルドレンレコード

——とあるパーカーを被った男みたいに見える少女が歩いていた。彼女は耳に白いイヤホンをあて、街を歩いていた。

街は八月の半ばにもなり、暑さのピークである。そんな中歩く少女は、なんだか少し別の次元にいる人間にも思えた。

そして——それを嘲笑うかのように彼女は笑った。

——また、とあるところでは赤いジャージを羽織った少年が道を歩いていた。路地裏を知ったかのように歩き——たどり着いたのは、小さなドア。

もう彼は何度このドアにたどり着いたか、覚えてはいない。

しかし、このドアの前で感じる吐きそうなほど気だるくなる生ぬるさはもう体に染み付いていた。

彼は何も考えずに、ドアをノックする。彼の中に染み付く何もかもが溢れ出しそうになる。堪えて——扉を開けた。

「まだ視えない？」

まるでそんな声はどこかから聞こえてきそうだった。

少年はもうこの夏をどれくらい過ごしたことだろう。数えたら、気が狂うほどに彼はもう夏を体感していた。耳にたこが出来てしまうほど聞き慣れてしまったセミの声、眩しい太陽、窓から見える向日葵。どれもがもう見慣れた景色だった。

「……今日こそ、いや今度こそ……」

彼は、あるものをある人間から奪われ、繰り返していた。それは彼にとってどんなものにも代え難いものだった。

そして——彼は8月14日の空のもとへ。

フードを羽織るパーカーはこの時期には似合わない。

それは誰にだつて分かりそうなことでもあるが、この少年には知らない風を装っているみたく、涼しげに考え事をしているのか、目を瞑っていた。

彼はあの日——躊躇した。だが、それは忘れたくても、忘れられないこと。忘れない、忘れない。だが、そんな脳裏から声が聞こえる。「今だ、取り戻せ」

飽きるほどに聞いたその声に——セトは無言で頷いた。

とあるところにメデューサがいた。彼女はとても子供を可愛がっていた。しかしそれと同時に彼女は怖がっていた。

——ここは、人間に知られすぎた。

——近いうちに、人間がやってくる。

それを彼女は知っていた。だから、子供、マリーだけは守りたかった。

「おかしーさん！」

ふと、シオンが気付くとそこにはお花を摘んで笑うマリーの姿があった。

この平和が——いつまでも続けばいいのに。

彼女はそう、願っていた。

「このまま死んだって誰かが代わりになるから」

彼はそんなことをアヤノに話した。今まで誰にも話すことのない彼の気持ちを知ることができて、アヤノはとても喜んでいたりだろう。

しかし、彼女は——もう辛かった。シンタローみたいに思い切り自分のことを話すことが出来なかったのだ。

「……こんな世界、壊れちゃえばいいのに」
塀を乗り越え——彼女は思った。

「カミサマなんて居るはずないのよ……」

——彼女の姿は、そして、消えた。

『駆け抜けろ、もう残り一分だ』

ヘッドフォンから聞こえた自分の声を聞き、エネはふと思った。

「……どうして、世界って滅んじゃうんだろ？」

思い出すは——夢にも似た記憶。

自分の目の前で、男子生徒が倒れている。

そして、それを嘲笑うように立ち尽くす先生らしき白衣を着た男。

「なにしてるんですか？ 助けなくちゃ……！」

エネの声に先生は答えない。エネは急いでそこへ向かおうとするも——まるで見えない壁に包まれているらしく、助けることができない。

「……な、なんで助けられないのよ!!」

悲痛な叫びに先生は笑う。そして——はつきりと言った。

「ねえ、次は君の番だよ？」

ひどい夢を見た気がした。

それがコノハという少年の一夜の感想だった。

なんというか、懐かしいようで、新しい記憶。

いったい彼女は誰なんだろうか。

「……理不尽な構成、か……」

彼はなんとなくつぶやいてみた。

そんなものを肯定しては未来を生み出すことはできない。

だから、ヒトは抗う。

それは——そのコノハも一緒だった。

とあるコンサート会場では、アイドルがフリル死でもするのかと言わんばかりのフリルをつけた格好で、歌を歌っていた。

「少年少女前を向く」

彼女の歌一単語だけでも、歓声上がる。アイドルは大変だ。

突飛な世界でも、彼女は一時はプレッシャーに押し負けることだっであつたはずだ。

でも、彼女は今ステージに立ち、歌っている。

アイドルは、大変である。

そのころ。

正確には八月十四日の午後五時くらいのことだ。

パンザマストが町中に鳴り響き、そんな中パーカーを着た少女が誰にも気づかれることなく（気づこうともせず）走っていた。

「……まったく、カノはどうした?! あいつ一体何やっている?!」

「カノだったら夜の街で決めポーズを」

「よーしあいつ作戦終わったら絶対生かさない」

——とこんな冗談も言ってるようで、夕日が沈むその中を走ると、それすらも希望論と勘違いしてしまう。

カゲロウ計画。

キドも内容は知らない、その計画を彼女たちは阻止しようとしていく。

しかし、それをどう阻止すればいいのか、実際にはこれしかわかっていない。

『午後五時過ぎにあるトラック事故を回避せよ』

また、轆かれた。

やりなおす？ やり直し？ ヒビヤは考えた。

「ツレモドセ」「ツレモドセ」

世界の声が彼に聞こえる。

でも、また救えなかった。彼は泣くほどの涙すら枯らしていた。空を見ると——三日月が赤く燃えていた。

「マリーちゃんがなんとかしてる……なら私も頑張らなくちゃ!!」

電子の波を華麗にエネは泳ぎ、目的地へ駆けていく。

電子の海とは、滑稽なもので泳ぐことというよりかは浮くことしか出来ない。現実世界では有り得ないが、この世界では常識に近い。

彼女の目的は暗号——コードを0——無効にすること。たったそれだけでも何億桁あるか解らないコードから特定箇所のみを無効にすることは人間ならば不可能に近い。

だが、彼女ならどうだろう。彼女は——電子の海に浮かぶAIだ。こんなことは得意分野、朝飯前に過ぎない。

「ご主人も頑張ってくればいいんですけどね、これで」

誰に言うでもない、独り言を呟きながら、彼女は作業を再開した。

「解ってる……解ってるさ……」

シンタローはすべてを終え、外へ出ようとしていた。

しかし彼は二年もの間、ニートだった。

そんな人間がすぐ出ようなんて、簡単にはできないだろう。

しかし、彼以外の人間はみんな頑張っていることは事実である。

「……想像力の外の世界……」

彼は独りごちる。そしてひとつ深呼吸。

ドアノブを——しっかりと自分の意志で握り、ドアを開けた。

そして少年少女たちは——オーバーな空想戦線へと踏み出していった。

「お先にどうぞ?」

余裕ぶった顔でコノハはヒヨリたちを先に歩かせる。しかし、ヒヨリは初めて会った人間に嫌悪感を抱き、舌を出した。

しかし、コノハはそんなこと思われてるとは思つてなく、無邪気な目で笑つてみせた。

それを上から眺める、カノたち。

「……セト、じゃじゃ馬は止まりそうか?」

「いやー、予想外すぎたね。まさかエネがこんな力持つてただなんてもうあつという間にコードの半分を無効化しちゃったよ?」

「そうじゃなくて、じゃじゃ馬は!」

「そつちの件だけど厳しそうだね。あの科学者もバカしたのか、パスワードで力を解除したあとの対策を怠つてたらしい」

「ほんとあのやろう……、まじで会つたら踏み潰す」

「キド真顔で言わないで怖いから」

セトはキドに怯えながら、情報端末の画面に指を滑らせた。

八月は夜が深くなる。暦では七月を超えればあとは夕暮れが早まっていくのでパンザマストが鳴る前でも既に暗くなってしまうのだ。

夜になる。モモはそんな中、独り怯える心を殺して歩いていた。

『オコサマ』なら燃えるはずの延長戦を味わいたい。

彼女はそんなことを思い、走る。駆け出す。

「逆境ぐあいがクールだろ?」

隣に走るキドが息も上げず、笑う。

モモはその言葉を聞き——しっかりと頷き走っていく。

「寝れないね……。まだまだ実験は始まったばかりさ」

実験室とは到底思えない塞がれた地下空間で男は笑っていた。

このオコサマたちの抗う姿を見て、笑っていた。

「ほら、早く。まだ……。この実験は終わらせてはいけないんだ」

そうやって男は沢山の機器類のひとつのボタンを押した。

テンポ良く視線を合わせて、施設へ滑りこむ。そこには既にモモとキドを除く全員がたどり着いていた。

モモはその全員にハイタッチしていく。恥ずかしくたつて、彼女には関係ない。そしてメカクシ団全員のビートが同調、鳴り始める。

「……諸君、考えては遅い。行動は本能、いや命令を忠実に従え！」

キドの言葉に、全員がはつきりと頷いた。

ワンコードで視線を合わせて、ぶっ飛んだグループをぶっ飛ばす。

名前の通りに、だ。

きつと、その風景の隙間に、『答え』が見えるはず――。

キドや、ほかの人間はそう考えていた。

「……ねえ、キド？」

「なんだカノ。まだ俺は怒っていることを忘れているな？」

「キドはどうなの？」

「……どう、とは？」

「ほら、だからこのチームのことだよ。価値観が全員すれ違ってる人間だったわけじゃん。けれど、やることは、目的はたった一つだったわけで、このギスギスした感じもなく……。言いたいこと、なんとなく解る？」

「悪くはないな」

カノの質問にキドは即答する。

「よ、よっしや！ だからメカクシ団を正式名称に」

「それは断る」

「ええー……」

キドはカノの提案を却下（さらにジャーマンスープレックスのおまけ付き）した。

「き、キドが成長して俺は嬉しいよ……」

「カノ、お前本気でうざいぞ？」

「そう真顔で言われるとちよつと崩れ落ちるかな……ハハ」

カノはそう言つて笑顔のまま、気絶した。

モモは考えていた。

自分が変わったのは、ここに来てからだ。

チープな言葉だとして、手をとりあえば、それは『アイコトバ』に過ぎない。そう、言い合えるってことを。

自分自身が——少しだけ前を向けることに。

暑い中を走っていくうちに少年少女たちは思い出して、口に出す。

「……キドさん」

「なんだ、モモ」

「わたしたち……出会えたの偶然ですよね？」

「ああ、そうだな。カノがテキストに連れてこなければ、お前はまたアイドルとして苦しんでいただろうな」

「私、ここにきてから、こんな突飛な世界のことを、『散々だ』って笑い飛ばせるようになったんです。ほんとうに、ここにこれて幸せでした！」

「……、」

モモの言葉に、キドは何も答えない。

「……あの、キドさん？」

「モモ、お前の言いたいことは解った。……感謝の気持ちを伝えたいこともな。だが、それはもう少し取っておけ。俺はきつとそれに答え

る」

そしてその言葉を最期に——合図が終わる。

かたや、メカクシ団を結成し、全てから抗おうと決めた少女。

かたや、アイドルだった自分に散々だと思い、全てから逃げ出そうとした少女。

かたや、母の愛を受け、そして外の素晴らしさを教えてくれた少年に恋した少女。

かたや、八月の永遠のループから二人揃って脱出を決意する少年少女。

最善策はその、目を見開いた先にある。

感情性で創られたメビウスの先へ行き、自分たちの人生を狂わせた“やつら”に目に物見せてやるのだ。

「……」

テレビを見ていたメカクシ団員全員はこれを見て、啞然としていた。顔文字にするなら「(。D。)」って感じだろう。

「いやあー、どうでした？ カノ特製メカクシ団紹介DVD！ 結構素晴らしい出来じゃない？」

「……カノさん」

「ん、ヒビヤくんどうしたの」

ヒビヤはカノが顔を出したのを見計らって、右ストレートをぶちかました。

「ぶっほお!!」

「なんで俺ヒヨリに押されてるわけ?! いい加減にしろよ!!」

「ちよ……ま……なぐりす……だ……」

「あーいうのはほっておくが一番だ」

キドのその言葉で、メカクシ団は別の部屋へと行った。
残されたのはヒビヤのパンチでぼこぼこにされたカノだけだった。

さて。

ところで、なぜこんなことになっているのだろうか？

話は——八月十五日に戻ることになる。

プロローグ チルドレンレコード
完

第零話 ロスタイムプロローグ

これはそんなとある日のことだ。

「——君は？」

目を覚ますと、僕は真つ暗な空間にいた。

そして、ひとりの人間がいた。

「僕かい？ 僕の名前は…キドだ」

「キド？ どういう意味だ？ なんで君はここにいる？」

「おっと、少なくとも僕は君に敵意なんて持つちやいないよ。それだけはや言っておこうじゃないか」

そう言つてパーカーのフードを脱いだ人間は、女性だった。なんというか、男装に近い服装だったので解らなかつたとも言えるが、そんな彼女はこの空間が暑いのか、パタパタと手で扇いで。

「ふう……、さすがに八月でパーカーは暑いな……。まあ、いろいろと目的があるので仕方ないが……」

キドはそう言つて、僕に近づいてきた。

僕も動くこうとは思うが、動けない。

「さて——単刀直入に言おう。僕は君を助けに来た」

「……?!」

「まあ、そう慌てるな。——とりあえずこれだけは言っておこう」

「？」

「君はこれからここを脱出する。君は——何かしたいことはあるか？」

キドの言葉に、僕は考えることなんてなかった。

やりたいことは、たったひとつだけ。

「——彼女を、救いたい」

「それが聞ければいい」キドは頷いて、そしてこちらに手を持ってくる。

「さあ、ヒビヤくん。歓迎しよう。メカクシ団へ」

そして、僕はその手を強く握り返した。

第一話 カゲロウデイズ

八月というのは夏で言えば折り返し地点みたいなもので、だけでもその暑さに耐え切れず毎日、様々な人間がプールなりなんなりと涼しさを求めている時期である。

例えばここにいる少年——ヒビヤもその一人である。

「暑いな……。いや、全く」

夏は暑い。だからあまり好きじゃない。さて、とヒビヤはiPhoneを眺め見る。

「……もう十二時半かよ……。急がなきゃな……!!」

彼はとある人間と待ち合わせしていた。その人間と言えば。

「おっ、待ってたよっ」

「ごめんごめん。遅れちゃって」

ヒビヤは目の前にいた少女に笑って謝りながら近づく。

少女とは幼馴染の関係で、いつもよく遊んでいる。今日も朝メールが来たので、彼女が待つ公園へとやってきた次第であった。

「今日どうする?」

「なに、決まっていなかったの」

「うん。ヒビヤがきたら決めちゃおうと思って」

「なんじゃそりや……」

ただ、そんな感じに会話を続けている。それはただの八月の普通の風景であった。

「あのさ、ヒビヤは夏は好き?」

「夏?」

「そう、夏」

「僕は別に……。でもまあ、アイスとか食べられるし、特にいいと思うけどね」

「そっか……」

「君は?」

「私もアイスが食べれるからいいけど……」

「けど?」

「でもまあ、夏は嫌いかな」

彼女は猫を撫でながらふてぶてしくつぶやいた。ちなみに撫でている猫は僕の飼う猫でもなく、彼女の飼う猫だ。なんでも3日前に拾ってきたんだとか言うけど最近猫にばかり寵愛している気がして、あまり僕はこの猫を好きになれていない。猫はうらやましいだろうと言わんばかりに少年の方をみて嗤う。

「……ブランコもあきたし……、どっかぶらっつとしようか？」

彼女が提案して、ヒビヤは頷く。

しかし、猫は嫌がつて(まるで「俺に先に行かせろー!!」と猫が言ってるみたい)に)彼女の手からするりと抜け出して道路を渡っていった。

「危ない……っ!!」

それを見て、彼女も道路へと向かう。やれやれ、とか思いながらヒビヤがふと空を見上げた。

その目に、飛び込んできたのは、赤に変わった——信号機だった。

*

刹那、道路を横切ったトラック。

それに引かれ、悶え苦しむ彼女。

轢きずられていつて、まるで地獄の賛美歌のような泣き、叫び声がヒビヤの耳へしつかりと響いた。

ヒビヤはそれを見て辺りに散った血飛沫の色と、彼女の——たった今まで生きていた人間の——香りとが混ざり合った独特な空間に噎せ返ってしまった。

そして、ふと向こうを見ると。

嘘みたいに、陽炎が浮かんでいた。それはまるで成長した彼自身に似ている。

そして、陽炎は嗤って、言った。

「嘘じゃないぞ」って。

その声が、ヒビヤに届いたかは解らない。なぜなら——ヒビヤはその後すぐに夏の水色を掻き回すような蝉の音を最後に、意識が途絶え

てしまったからだ。

「……!!」

そしてヒビヤは、自分の部屋のベッドで目を覚ました。

「……夢だったのか?」

そんなことを思いながら、部屋では時計の針が沈黙をかき消すかのようには鳴り響いていた。

8月14日の午前零時を回った辺り。

なぜ覚えているかと言えば、その時も蝉の音がやけに煩かったからだ。

*

(でもさあ、少し不思議だな……)

ヒビヤはこの前と同じブランコに座って、少女の話を聞きながら、思い出した。

思い出したことは、同じ公園で昨日見た夢。

でも、考えても解ることじゃないな、と思っていた。

「もう今日は帰ろうか」

「そうだね」

「ねえ。今日は別のルートで帰らない? 今日暑いから日陰の多い

ルート通って帰ろうよ」

「えっ?」

「ね? いいでしょ?」

「うーん……。ま、いいか」

こうして、少女を助けることにとりあえずは成功した。このままあの信号を渡っていたらまたあの惨事が起きてしまうのを、彼は知っていたから。

とりあえず向かうところは遠回りして、歩道だけで帰れるルート。大きいビルもあるし道も細かいからさつきみたいにとトラックがどうこうなるってこともないだろう。

そして、大通りに抜けたとき。

周りの人は、ただ何も言えず、皆上を見上げ口を開けていた。

「なんだろう?」と呟く暇すら与えられなかった。
そう。

上から落ちてきたのは、鉄柱だった。

*

そして、少女を貫いて地面へ突き刺さった。

周りのギャラリもどきの耳に劈く悲鳴と、どこかのかき氷屋さん
に置かれて風に靡いて鳴った風鈴の音が、木々の隙間で空回りして
いった。

そして、ギャラリーのところから離れていく人間がいた。

揺れるからだ。ふわふわとしている。そうだ。

ヒビヤは、崩れ落ちる自身の身体を考えることもせず、呟いた。

あいつだ。カゲロウ。あいつがやったんだ。

それを知っているかのように、カゲロウは嗤って。

「夢じゃないぞ」

って、呟いた。

そして、また視界が眩み始めて、ヒビヤは無意識に少女の——鉄柱
が貫かれもう生きていない少女の——横顔を見た。
どことなく、横顔は笑っているような気がした。

*

「おい」

「……」

「おい!」

ヒビヤはその声ではっと目を覚ました。

「どうした?」

隣にいるのは、先程会った少女、キドだ。ヒビヤはどうやら眠って
いたらしく、そして夢を見ていたらしい。

「ああ。すいません。夢を見ていました」

「その割にはずいぶんと魔されていたな。大丈夫か?」

「いえ、大丈夫です」

「そうか、ならいいんだが」

キドはそれ以降は冷たく突き放した。

「ところで、キドさん。どこへ向かうんですか？」

「どこへ、か。面白いことを聞く」

「――？」

「メカクシ団の本部だ」

キドは唾って、言った。

第二話 想像フォレスト

とある森の中にある、とある小さな家。
そこにはひとりの少女が住んでいた。

名前はマリーという。

少女が本を読んでいると、夏の爽やかな風が、窓をノックした。
「なんだろう？」

そう思つてマリーは窓を開けると、部屋に鳥の声が響いた。何羽もやっけてきて、まるでマリーと話をしたがっているみたいで。

マリーはそれに気づき、読みかけの本を置いて、

「どこからきたんだい？」

と笑つてみせた。

鳥はその方には居なかった。

だつて、マリーは目隠しをしているから。

古いのっぽな時計は午後三時を報せる鐘を鳴らしていた。

*

世界は意外とシンプルに出来ている。0と1だけで……表現は難しいかもしれないけどそれくらいで表現できそうなくらいだ。世界なんて複雑に出来ていれば恐らく単純な人間は生きていられないだろう。

だが、単純になりすぎるが故の、出来事だつて起きる。

彼女は複雑に怪奇した存在だった。複雑だからこそ、誰にも理解されることもなく、昔から彼女は独りだった。

だが、そんな彼女を優しく諭すのもいた。彼女の母親である。

彼女の母親はいつも彼女の頭を撫でて、

「大丈夫だよ」

と楽しく話してくれた。

マリーは町外れにある森の奥深くにひっそりと佇む家で暮らしていた。ずっと一人暮らしだけど、誰もやってこないから慣れてしまつ

たらしい。せいぜい鳥たちが毎日マリーの焼くクッキーを目当てにくるくらいだろうか。

「さあさ。クッキーあげるよ」

そう言つてマリーはクッキーの欠片（それは事前に準備してある）を窓際に置くと、鳥達はそれに群がつて食べている。音で何となくわかるからだ。

きつと鳥は美味しそうに食べているのだろうか。マリーは思ったがそれをマリー自身が見ることは出来ない。だけど、鳥達の楽しく食べている表情を想像するだけでもそれつて、結構楽しいことである。

「ふわあ……。もうこんな時間かあ」

どうやら、マリーは眠つていたらしく、気づいたら鳥は居なくなつてたし、日は傾いていた。目隠しを外し時計を見ると4時を少し回つていた。

マリーは立ち上がつてさつきまで読んでいた本を本棚にしまった。いろんな本があるけどまだ読み終わらない。マリーが死ぬまでに読み終わらないんじゃないかな、とか思つてしまふくらいだ。

マリーはこういう体だから、目に写つた無機物《モノ》にしか安堵することは出来ない。外に出たらずぐ理解されなくて、排斥しようとする。だからマリーは外になんて出たくない。出ようとは思わない。「アラビアンナイトかあ……。……」

いいなあ、私も旅がしたいなあ……。……」

だから、彼女は物語の中でしか知らない色々な世界に、少し憧れる。別にそれくらい。

許してくれる、よね？ と。

彼女は毎日そんな理不尽なことを思い浮かんでしまう。

けど彼女の中じゃ、案外それが人生として成り立つてしまう。

いつか突飛な未来を想像して、膨らむ世界がノックするのはありますか？

出来れば、今日か明日にでも。

彼女は、そんなことを思つて、一日を終えるのだった――

あの日がくるまでは。

「ほんとにこんな山奥にいるのか？ キド」

『そんなめんどくさいことでいちいち通信するな。 “ヤツラ” にバレてしまうだろう』

「そんなこと言っても、バレないさ。きつと、ところで本当にこんな山奥に家なんてあるんだろうな？」

『なかったときは私が責任をとろう』

「……体で？」

『○すぞてめえ』

「すいません許してくださいリーダー」

『最初からそう言ってくればよかったんだ。んで、家は見つかったか？』

「……ああ、あれか」

少年は立ち止まった。

そして、そこにあつたのは――

マリীর住む家だった。

「ここか……」

少年の眩きを聞き取ったマリীরは、

「!!」

驚いて飲みかけのハーブティーを机中に撒き散らした。もし、鳥がいたら驚いて逃げてマリীরがここにいるのがわかってしまったのかもしれない。だが、疑問点が浮かぶ。なぜ少年（マリীরにはどんな存在かはわかっていない）がここに来ているのか、マリীরには不思議でならなかった。

「どうしよう……」

とりあえずマリীরは下に降りて、ドアの向こう――きつと、その声の元がいる――を見つめた。対策なんて、考える暇すらない。

「目を合わせると、石になってしまう」

ふと、マリীরは母親から聞いたことを思い出す。

「私たちの目は成長すると赤くなる。」

その赤は見るものを凍りつかせて、石にさせてしまうの」

マリীরの目もそうなっているらしく、時折鏡を見つめっていると、写っているのは、赤い目。普通の人間とは違う、真紅の目。

だから物語の中じゃマリーのような存在は、怖がられる役ばかり、「仲良くしてくれるなんてないんだ」ってことはマリー自身理解していて、それで怖がっていたのかもしれない。

トントン、とノックがドアのむこうから響いた。そんなのは初めてで、緊張なんてもんじゃ足りないくらいだった。なんだろう、マリーの目には『恐怖』すら浮かんでいたのかもしれない。

想像していた突飛な世界はマリーが思ったよりも、実に、実に簡単にドアを開けてしまうものだった。

*

人間が嫌いだった。

母親が、死んだ訳を私は目の前で見たから。

私が数年前、人間に虐げられた。恐らく……珍しい存在と思われたから。

そしてそれに気づいた母親が私を守ろうと“力”を使って——死んでしまった。

だから、私はずっと一人。ずっと、ひとり。

*

扉は唐突に開かれて、誰かが入ってきた。マリーはただ、目を塞ぎ蹲っていた。

その人は驚いていた。だから、マリーは言った。

「目を見ると、石になってしまっんだ」って。

その人が、微笑んだのを、覚えている。

「僕だっつき、石になってしまっ、と怯えて暮らしてたんだ。

だけどき、世界は案外怯えなくていいんだよ？」

その人はそう言ってマリーに服を着せた。なんだろう、この服は？

とマリーがつぶやこうとして。

「これはパーカーっていうんだ。

君も、メカクシするんだろう？」

これはそういう人にいい服だよ」

「……ありがとう」

「うん。お礼はいらないよ。」

そうだ。君って世界がわからないんでしょ？
教えてあげるよ。うーんと、ちよつと待ってね」

そう言つてその人は薄い葉に近い何かを取り出した。

「これは、iPodだね。」

いろんなことがわかるんだ……。

ほら、これを耳に当てて……」

その人は、紐みたいなものをマリーに差し出す。彼女は言われるがままにつける。

そして。耳に音が響いた。

世界は、やっぱり想像よりも素晴らしかった。

心の奥に溢れていた想像は、世界に少し鳴り出していた。

突飛な未来を教えてくれたあなたが、もしまた迷ったときは、私がここで待っているからね？

彼女はそんなことを思うのだった。

*

外を出て、少年。

「ああ。キド。確かにメデューサはいたな」

『だろ？ 私 の調査通りってわけだ』

「キド。それじゃこれでいよいよ……」

『ああ』

キドと言われた少女はうつすらと笑みを浮かべて。

『——救いに行くぞ。 “彼” をな』

第三話 メカクシコード

ヒビヤがやってきて、もう一週間がたとうとしていた。

ここは、メカクシ団のアジトらしい。だが、ここまでは目隠しされて連れてこられたのであまりよく覚えていない。

ヒビヤが思い出すのは——あの繰り返し八月十五日のみ。

「やあ、ヒビヤくん。調子はどうだい？」

ノックをして入ってきたのはキドだった。キドは珍しく笑っていた。その風景をヒビヤはなんだか珍しげに眺めていた。

彼女は今まで、笑うことはなかった。だからこそ、彼女の笑顔がなんだか変に見えるのだ。

「……調子は特に」

「そうか。ところで……いろいろ整理はついたか？」

「……はい？」

ヒビヤが尋ねる隙も与えられず、キドは何かを差し出す。

それはグレーのパーカーとiPodだった。

「これは……？」

「メカクシ団の証だ」

「メカクシ団っていったいなんなんですか」

「この世界を創ったカミとやらに喧嘩を売ることを目的としている」

「何を言ってるかさっぱり」

ヒビヤが思うこともなく。

「いいから、着ろ。作戦会議は十分後に開始するからそのつもりで
そう言っってキドは部屋を後にした。

残されたのはヒビヤと、パーカーだった。

*

そして。

とある研究所にキド、ヒビヤを含むメカクシ団員はいた。

「いいか？ 作戦通りに決行しろよ？ 彼〃を……救うんだ。分
かったな？」

キドの言葉に全員が頷く。ヒビヤも同じだ。

さて、とヒビヤはぐるりと見渡してみる。そこにいるのはクリーム色の服を着たメイドっぽい格好の女の子や、もうひとり女の子がいたりする。

「メカクシ団は女性人口の方が高いみたいだな」

「そりやそうさ。女尊男卑とは言わないが、女性が多いし、団長が女性つてのもあるけどね。男共は雑用とかめんどくさげな仕事がほとんどかな」

「うげえ。なんてブラック」

「慣れればどうってことないよ?」

「すごいなー調教もしちゃう系かー」

「……つべこべ言うともマリーに石化を命令するぞ?」

「ごめんなさい」

そんなコントにも近いやりとりをして、キドは息を吸う。

「さあ、任務開始だ」

ズボンの裾が伸びきってiPodのコードが揺れている。イヤホンを充てがってフードを被っておけばひとまず問題はないだろう。ヒビヤは走りながら独り事のように、呟く。

「……目隠し完了」

ヒビヤの目にはいつもどおりの見えない現状が広がる。非常灯が通路の両側から赤く光り、それはまたシユールな景色へとなっていた。

ヒビヤは思った。

案外今日がこなかったとしても生涯不安症な君とローファイな風景を連れて、明日へ行けることが出来たんだろう、と。

でも、そんな簡単じゃない。現実はその甘くないのさ。

だからいままで『メカクシ団』として準備を進めてきた。そして、今日だ。

「さあさあなんかないものか」

ふとヒビヤは呟いてイヤホンから流れる曲を聴きつつビートを揺れ気味に刻めば、この世界もそうそう悪いものじゃないようにも思えてくる。なんて慣れやすい性格なんだろうか、と思っていた。

だが——それと同時にヒビヤは飽きっぽい性格でもあった。そんな虚栄心をのみこんで、二つ目の遮断機を右に曲がる。目的地はまだまだ先だが、警備がどこもなく重々しくなってきたのが解ると、どうやら目的地に近いようだ。

これからすることに、期待に胸が詰まって、思わず笑いが漏れそうになった。

しかしヒビヤのそれは空気に馴染んでしまつて、誰にも気づかれていないようで、結果的には断然オーライであつたりする。

「任務続行」

キドからその言葉を伝えられたときはもうタイムリミットまで20分だつた。

「……こりゃ、引けないな……」

そう言つてヒビヤはスニーカーの紐を結び直し。

「ほら、合図だ。クールに行こう」

走りながら、ヒビヤは考えていた。

「……どうして、キドは僕に協力してくれたんだろう？」

それが不思議でならなかつた。考えれば解る。なぜ一個人にメカクシ団という団体単位で参加するのか？ ヒビヤ自体よくわからなかつたし、むしろこれで彼女が救えるのかも怪しかつた。

だが、いまは藁をもすがる思いで、やるしかない。やりきるしかない。

ヒビヤはそう思つて、走り出すのだった。

「……さて、時間か」

気分は最高だ。ピーキーは揺れて、警鐘も止むこともない。

キドは隣にいるマリーを見て、笑つていた。

すべて、計画通りだ。これで、*彼*を救える、と。

科学者は恐れて、ネオンを不意に落とした。キドにとってはそれすらもチャンスだつた。

「さあ、今こそ君の出番さ」

キドは怯えるマリーに微笑む。

マリーは、震えたまま、キドの方を見て。

「……私か？」

「ああ。そうだよ。君がやらねば、目的を達成することもできない。君の目的も、何もかもだ」

「……でも」

「さあ。やるんだ。頼む」

キドは小さく、頭を下げた。

「わわわ。別に……そんなことをしないで……。わ。わかったから……」

そう言っつて、マリーは、

目を——合わせた。

「……ここか」

キドは、実験室のような部屋にたどり着いた。そこにはひとりの少年がいた。

そして、キドは嬉しさのあまり、声を震わせ、言った。

「——ここにいたんだな。会いたかったぞ……コノハ……！」

第四話 コノハの世界事情

「どうだ……。生き返った気持ちは？」

気づくと少年は謎の液体の中で目を覚ました。正直、夢だと思っていた。

「おい、どうだと聞いているんだ。君は人類の歴史に残るんだぞ？」

白衣の着た人間に言われ、自分の存在をおもいだす。

彼の名前は——コノハという。

どうやら、彼は終わった命を蒸し返す機械らしいのだ。

彼は昔の記憶を揺り起こす。

確か、少女が泣き叫び、「また会いたい」と呟いて——そんな感じだったのをおぼえている。

けど、記憶は曖昧で、それがほんとかどうかもコノハには解らなかった。

コノハはそんなことを思いながら、塀の向こうの街を眺めていた。

見た目世界の技術を濃縮したようにも見えるその街はただのハリボテに過ぎなかった。

「……『終末実験』ねえ……」

コノハは先程科学者から聞かされた実験概要なるものについて思いついて出していた。要するにこういうことだ。

この世界のある場所にスイッチがある。そのスイッチが起動さえすれば終末実験のはじまり、つてわけだ。

でも、それが誰によるものかはさっぱりで、早く終わって誰かと話したいなあとか思ったりしている。

ところで——『終末実験』は昨日時点で予想通りグダグダすぎて、もう8月も半分を過ぎようとしていた。

「もう諦めたほうがいいんじゃないかなあ」

コノハはそんなことを思いながら街を歩いていた。ふと、信号機の方を見ると、

少年が、期待はずれの車線の先で飛び散った。

泣き叫ぶ少女を、コノハは特に思うこともなく眺めていた。

「ああ、またか」

そう思っ、コノハは空を見上げた。

——秒針は進み出すのをやめて、世界もろとも眩み出そうとする。

この夢は——まだ、終わらない。

「……なんだ、大変だな」

ハリボテの街の外で、コノハは眠そうに欠伸を一つした。

外はなんだか騒がしくて、警報がさつきから鳴りまくっている。警

備はどうなんだろう。警備は。

「……まあ、まだ時間はあるからいいか」

そう言っ、コノハはまた回想へ入った——。

彼の頭はただ、考えていた。

ひとつ——この世界に自分がいる意味。

ふたつ——この世界で起きた夢みたいないな出来事。

みつっ——そして、現実に来ている事態。

その全てを絡ませ、結論のように呟いた。

「この世界はどうやら少しヤバイらしい」

【これは彼と彼女のお話】

だが、それを伝えようとも作られてしまった心ではもう言葉も届くことはないのだろう。

枯れる太陽の音が響き、蒸せる炎天下の目が大地を見つめていた。夏バテした世間にはじき出された様な蝉の声がもう鳴り響き始めたとして、この身体では救うこともできない。

「……あの科学者、一体何がしたいんだ……。透けてる身体だと？ 死んだからだを蘇らせてくれたのは嬉しいけれどこれじゃ生き殺しじゃないか……」

こんな身体じゃ、彼と彼女を助けるために伸ばした手も届くわけはなかった。

期待はずれの視界の先で、少年がまた飛び散った。踏み潰された。秒針はふざけて立ち止まって、踏み潰された未来を反対車線で見ている。

機械仕掛けの世界を抜けて、木の葉の落ちる未来——9月の風景へと、君の目で見なくちゃいけないのか？

それを知ってか知らずか「ざまあみろ」と言おうとしているのか、少年は笑っていた。

「失礼。少しお話を伺いたいのだが？」

コノハが物思いにふけっていると、ひとりの男が声をかけてきた。

「……誰だ」

「ああ。すまなかった。俺はシンタローというのだが……メカクシ団というのはご存知かな？」

「いいや。」

「そうか」

シンタローとコノハの会話を、ヒビヤは後で眺めていた。

「……ところで僕をどうするつもりだい？ どうせ実験体さ。殺すならなんなり好きにするがいい」

「ほんとならそうしてやりたいがそうもいかなくてね」

シントローは少し怒っているようにも見えた。

「お前をリーダーの元へ連れてくるように言われているのさ。コノハ」

シントローはそう言って手を差し伸べた。

コノハはそれをみて、握り返した。

第五話 デッドアンドシーク前編

《メカクシ団アジト》

「キド、ちゃんと連れてきたぞ」

「ご苦労だったな。感謝する」

「なに、お前の命令だったらなんでもやってやるさ」

シンタローはキドの言葉に、そう答えて部屋から出ていった。

残されたのは——キドとコノハ。

キドはコノハの方を眺め見て、ぽつり呟いた。

「——お前が『命を蒸し返す機械』とやらか」

「もしそうだったらなにか？」

「——いや、なに。どうせお前に私怨を叩きつけたとしても何の措置にもならないからな」

「……ああ、そういうこと」

コノハは何かを把握したらしく、少しだけ笑った。

「開発者の彼女を探しているんだね。……恐らくあのシンタローとやらも」

その言葉にキドの顔が少しだけ歪んだ。

「……何処に居る？」

「そんなことを言われても。僕はあくまでも機械としての立場デスヨ？ そんなやつが最高機密に近い存在の事を知ってるとは思えないんだけどね」

「そうか。……わかった」

そう言っただけでキドは小さく頷き、窓を見つめた。

「僕をどうするつもりだい？」

コノハは小さく笑って、首を傾げた。

「——そうだな。ならばまずは……私達の計画に参加してもらおうか。彼女を救う、R計画に」

メカクシ団員は、直ぐ様会議室に集められた。シンタローに、ヒビ

ヤ、マリーに、あのときはいなかた団員もちらほらといる。ヒビヤはどうやらニジオタコミュショーヒキニートの存在を見くびっていた。確かにそうだ。こんなアウトドア派のヒキニートがいるはずがない。しかもコミュニケーション能力ももしかしたら人並み以上はありそうな彼等が実はニジオタコミュショーヒキニート？ 世界は何だか概念の付け方を間違えたのではないかと思ってもしまう。

「さて、メカクシ団員の諸君、会議を始めよう。内容は簡単だ。『カゲロウ作戦』を決行する」

キドのその言葉を聞き、会議室はざわめきを隠せなかつた。それほど重要な作戦であることが、団員全員が理解しているというのがあつたのだろう。

「では、概要などを説明していく。まずは再び潜入、今度は箱庭内へと入っていく」

その言葉を聞き、ヒビヤは驚いた。何故なら、前回の作戦でも『何故かヒビヤにだけ』箱庭内には入るなど灸を据えられていたからである。

「ヒビヤは恐らく箱庭へ入るなどあのときは命令した。だが、今回はヒビヤも入っている。これは重大な作戦だ。失敗は許されない。いなっ！」

キドの言葉に、ヒビヤは頷く。

「よろしい。では——『メカクシ完了』」

その言葉と共に、キドやヒビヤ含むメカクシ団団員はフードを深くかぶった。

そして。

「……………ここが、箱庭……………」

キドたちは再びあの高い壁へとやってきていた。

「ああ。これがそうだ。……………さてと、入口を探さねば……………」

「既に見つけてあるが？」

「さすがはシンタローだな。よし、では入っていこう」

「礼もなしか」

「……ありがとう」

「どういたしまして」

そんなやりとりを交わして、メカクシ団は箱庭の中へと入っていった。

第五話 デッドアンドシーク後編

〃箱庭〃。

実質はヒビヤはそれしか知らない。それしか聞かされていない、と
いったほうが正しいのかもしれない。キドからの説明もなかったし、
シントローやコノハ、マリイも教えてくれなかったのでヒビヤは独り
仲間はずれの感じになっていた。

「…………ごめんね。何も分からなくて」

そう慰めるようにつぶやくのはマリイだ。彼女はメデューサらし
く、目を合わせると石になってしまうのだという。だが、実際は『彼
女にその意志がなければ』石にさせることもないので、皆分け隔てな
く仲間としている。

「いや、別に君が謝ることじゃないよ」

「そうだけど……、あなただけ解らないってのもちよつと……」

「マリイ、あまりしやべるなよ」

「それってまさかダジャレだったりします?」

「…………?」

キドはまったく解らないようだったがシントローが後で笑ってい
たので、シントローには解るものだった。どうやらこの団長、天然ら
しい。

「…………とりあえず、箱庭に潜入した」キドはフードをさらに深くかぶつ
た。「見たまえ。……」ここが箱庭だよ」

キドの言葉に従い、ヒビヤはそこを見た。

——そこは見覚えのある信号機だった。

ぞわり。ヒビヤの背中に冷や汗が走る。

「…………まさか、」

「漸く解ってくれたようで嬉しいよ。ここは…………箱庭。〃君が前住ん
でいた世界〃さ」

「…………ここが、箱庭…………、僕がいた世界…………」

「思い出したかね?」

キドはヒビヤに問いかける。ヒビヤはゆっくりと頷く。

「……さて、実はだな。君には少し難しい話をしておこうと思う」
「なんででしょう」

キドが言ったのはこんなことだった。

昔々、世界に見捨てられたメデューサがいました。

彼女は世界に捨てられ、世界の片隅に生きていましたが、あるとき一人の男性と出会いました。

彼らは結ばれて——一人の女の子が生まれました。
幸せな日々でした。

しかしながら、そんな幸せな日々は長くは続きませんでした。

そして、彼女は思ったのです。

「だったら、終わらないセカイをつくらう」と。

そして、終わらないセカイが完成した。

しかしながら、それは影響を受けてしまうモノもあつた。

『カゲロウデイズ』もその一つだった。

終わらないセカイ、カゲロウデイズ。

そして、一部の少年少女は——あるトラウマを持ってすごし、そのときに能力を手に入れた。

それは、『赤い目』だった。

そして、その影響を作った世界こそが——カゲロウデイズ、ここであつた。

キドの話は、ヒビヤには信じがたいものだった。

箱庭？ 世界？ 作り替える？

つまり、僕はそのメデューサのために生きていたのか？

作られた命だったのか？

ヒビヤは頭の中で考えた。けれども、結論などそう簡単に出るわけもなかった。

「……さて、行くぞ」

キドは走る体勢を取った。

「……どこへ？」

「さっきも言っただろう。繰り返しを行うことで調査する世界、とな。その条件はある命の終了——つまり、ヒビヤくん、君が救いたい命の終了が繰り返しの条件になっているんだよ」

彼女を救うために、ヒビヤは再びあの場所へと立った。

とはいっても、どうすればいいのか、ヒビヤには解らない。

ヒビヤにはどうすれば、彼女を救えるのかは解らない。

でも、彼には——思いがあった。

彼女を——救いたい。そして——伝えたい。

ヒビヤは、彼女が好きだった。

本当ならば、あの八月十五日でその思いを伝えるつもりだったのだ。

ただ、なんどもこれは繰り返される。いつになっても、いつになっても。

——これを、どうすれば彼女を救えるんだ？

ヒビヤは、ただ考えることしか出来なかった。

「……仕方ない。強引にでも連れ去るしかないだろう」

キドの言葉は一瞬だった。

刹那、キドの合図とともに向こうの公園で今話しているはずの彼女がここに連れてこられた。

「……え？」

あまりのことで、ヒビヤにはすべてが追いつかなかった。

だけど、これだけは解った。

彼女が——ここにいる。

今まで、助けることのできなかった彼女が自分の目の前に、手の届くところにいるということだ。

もう、あの繰り返しもない。

繰り返しもないのなら、九月へと行くこともできる。

「……よかったな、ヒビヤ」

気付くと、コノハがヒビヤの目の前へと来ていた。

「……？」

「僕は命を蒸し返す機械、らしい。そして、今まで君たちの存在を知っていた。だけど……救うことはできなかった。そして今……君達は君たちの手で運命を解き放った……」

「そんな、大層なことはしていないですよ。メカクシ団のみなさんのおかげです」

「私はただ目的のために行動している。それで利用したまでだ」

「またまた、そんなこと言つて。ほんとはさみしいんでしょ？」

「シンタロー、ちよつと黙れ!!」

こほん。

「……ひとまずはよかつたな。助けることができてる」

キドは咳を一つして言った。

「だが、これにより少し問題も発生するだろうな。プログラムのコードを、それも重要部分を削ってしまったんだ。バグも発生するだろうが、所詮は箱庭、おそらく繰り返しが繰り返されていくだろうな」

「……それって、どういうことですか」

「どうしたもこうしたも簡単だ。今まで君らの繰り返しによってこの箱庭は安定していったんだ。それが消えたらどうなる？ 即ちバグが起きたまま、プログラムを実行することになる。それが小さければいいだろうが、今回の場合はこの箱庭の根幹を揺るがすものだ。例えば、の話だがゲームのプログラムでソフトをインストールして認知するプログラムが動かなくなったらどうなる？ それはゲームとしては機能を失い、ゲームではなくなる。それがどういふことを意味するか、なんとなくでも君にも解るだろう？」

「……つまり、ここが消えてしまう……と？」

「それもありえるな。意味を失った実験施設は無意味だろう。……それがどうかしたか？」

「だって……そんなの辛いじゃないですか!! 僕らだけが助かって、ほかの人間が死んじゃうなんて！ そんなの……」

「なるほどな」

キドは笑って言う。

「じゃあどうする？ メカクシ団にいれば、もしかしたらその方法も見つかることができるかもしれないぞ？」

「……解りました。行きます。メカクシ団へ。今度は、自分の意志で」
「解った。では、歓迎しよう。メカクシ団へ！」

キドはそう言って微笑んだ。

夏の陽射しは少し和らいで、季節外れの北風が吹いていた。

ヒビヤ編

終わり

シンタロー編

第六話 ロスタイムメモリーI

考えたことはないだろうか。

自分が既に死んでいるのではないか——ということについて、だ。今の世界は非常につまらない。

生きる気力もない自分は、すでに死んでいるのではないか——。

「……曲が出来ねーっ！」

シンタローという少年はそんなことを考えている余裕があった。実際、イライラしていたのだろうが、けれども少年はイライラしている暇などなかった。

コーラを一口飲み、目を再びパソコン画面に向けた。彼は今、音楽を作っていた。

そこそこ有名なプロデューサーになって、アルバムを発売する——それがシンタローの目標であった。

しかし。

「ご主人、まったく毎日向かっているのにこの出来……やはり派手な何かがないとだめなのでしょうか？」

「おい、何を言っているんだ？」

そう言つてエネ——シンタローのパソコンに住み着く少女——は笑つて、

シンタローの目の前の画面に浮かび上がっていた演奏データを強制的に削除した。

「うおおおい！ 何をするんだよ!？」

「ちよつとしたアレが必要かと思ひましてテヘペロ」

「テヘペロじゃねえ！」

さて。

シンタローがどうして、このような状況になったのか。

そんなこと、解りもしない。

「……つたく、外にでも出るか」

そう言つてシンタローはハンガーにかかっている赤いジャージを羽織つた。

——彼女のことを、忘れたくないから。

シンタローは、忘れなくなかった。いや、忘れられなかった。だから今も、この赤いジャージを着ている。彼女の、好きな、色。

「…………主人？　どうかしました？」

エネに呼びかけられ、シンタローは現実には引き戻される。

「ん…………いや、なんでもない」

そして、シンタローはスマートフォンを取り出して、イヤホンを着する。エネもそれを見てスマートフォンに自らのデータをインポートした。

夏は暑い。

当たり前なことではあるが、八月十四日という日（つまり今日）は午前九時の時点で猛暑日を気象庁が発表するほどの暑さだった。

そんな町並みを赤ジャージのシンタローは歩いていた。

当たり前だが、保険証は持参している。「いつでも倒れても身元も判明するし病院行けるし一石二鳥だね！」と彼の妹であるモモが言ったためである。

「ほんとに今日は暑いですね…………。あんまりスマートフォンつて中にある暑い空気のためにファンなんて付いてないんですね…………」

「つまり？」

「ノートパソコンを今度から持ち歩いてくださいね！」

「アホか！　そんな余裕ないんだよ！」

ぎゃーこらぎゃーこらと、シンタローとエネはぐだぐだ駄弁りながら坂に差し掛かったところだった。

シンタローは立ち止まり、坂の上を見た。

そこには一人の少女が居た。

カゲロウのように、ゆらゆらと浮いていた。

「アヤノ……！」

彼女は、彼が知る数少ない人間のひとりだった。そして彼は——あの夏の記憶を思い出す。

ある炎天下の日のこと、僕らは歩いていた。

まだ、とても暑く夏の温度が目に残っていた。

「ねえシンタロー、明日土曜日じゃない？ どっかにいかない？」

「構わないですよ、何処かに行ってくれ」

僕は、あまりにも君が構ってくるから、君の手を払った。

「行かないよ」

そう言っ君は、僕の手をつかみ返した。

「……五月蠅いな」

振り返ることもなく、僕は歩いていった。

僕は——いや、『俺』はその頃の自分に、問いかける。

——でも、本当の心は？

シンタローは買い物済ませ、またいつものように引き籠っていた。

「……主人、そんなんじゃないですよ？」

エネが心配するも、伸太郎には届かなかつた。

伸太郎自身は天才である。

だが。

そんなものでは、前を向くことなどできないことは、彼には理解できていた。

「……巻き戻ればいいんだ」

ぽつりと。

シンタローは呟くが、それは彼以外の人間に聞こえることはなかつ

た。

「……なあ、エネ」

「どうしました？」

「もしも、もしもだが、カゲロウが夢を見せてくれるとしたらどうする？」

「どうでしょうね〜」

エネは小さく微笑む。

「……まあ、いい。いいよ。悪かったな、変なこと聴いて」

そう言っつてシンタローは自らのベッドに潜り込んだ。

「ちよ、ちよつとご主人!? まだ昼の二時ですよ!? 寝るには早すぎないですか……!」

エネの心配は必要もなかった。

彼はまだ眠っていない。

彼が考えているのは、ただ一つ。

——もしも、自分が死なない世界があるとすればなら。

だが、彼は知っている。

アヤノという人間は、例えば彼が何千年と生きようとももう居ないという事実を。

第七話 夕景イエスタデイⅠ

榎本貴音という女子学生が、学校の廊下を歩いていた。彼女の目もときには大きなクマがあり、彼女が寝不足であることを語らせる。いや、寝不足というより寝ていないのだ。彼女は徹夜をしていたのだ。徹夜で何をしていたのか？ それは――。

（ああ、ちくしょう！ どうして、あそこでやられちゃうのよ、私のバカ！）

彼女は、あるゲームの上位ランカーだ。そして、そのゲームをやる時間というのが夕方から深夜、挙句は明け方といった時間で、結局そのためには睡眠時間を削らなくてはならないという感じになっている。

「……ああ、眠い」

そう呟いて、彼女は廊下を歩く。目指す場所は、ただ一つだった。準備室の扉を開けると、一人の青年が本を読んでいた。

九ノ瀬遥。それが彼の名前だった。

「……なんというか、あんたいつもそんな感じよね」

貴音が言うと、遥は小さくわらう。

「そうかな？」

「そうなのよ」

「そうだった」

そんな漫才まがいの口喧嘩をほどほどに済ませ、貴音は自らの席につく。とはいえ、この教室には貴音と遥の席しか存在しない。つまりは、ここにいる学生は彼らだけ――ということになるのだ。

「……文化祭の準備、進んでる？」

「うーん、まだまだかな。絵が全然進まないよ」

「なによ、絵が描くのが好きなくせに」

「そうだけどさあ」

彼らは文化祭の準備で大忙しだった。いや、彼らだけではない。今この学校全体が文化祭の準備に忙しいのは変わらない。

彼らが出展するのは、シューティングゲームだ。対戦するのは貴

音、ゲームプログラミングを行うのがこのクラスの担任である楯山研次郎、イラストを担当するのが遙というふうになっていた。

貴音はほぼ毎日担任である研次郎に進捗状況をたずねていた。彼曰く、ほぼ順調なペースで進んでいるのだという。だとすれば、問題となっているのは……イラストを担当する遙、というわけだ。

「……私は特に問題ないとして、遙が終わらなくちゃ、ゲームとしてほぼ成り立たないんだからね。頑張つてよね」

貴音の言葉に、遙は小さく微笑み、

「わかっているよ。だから、頑張る。自分がやりたかったことだし」
その言葉に答えた。

「そうと決まれば、今日もバリバリ絵を描いてね！」

「そんな……。授業とかは？」

「授業なんてないじゃない。結局文化祭までは授業もないのだから、思う存分作業が進められるよ」

「そうだけれど……」

「さー。さっさと描いて！」

そう言つて、貴音は遙に絵を描くよう促した。

遙は頷いて、ペンを手に取り紙に線を起こしていった。

第八話 夕景イエスタデイⅡ

そしてやってきた文化祭。

貴音と遙の教室の出し物はシューティングゲームだった。

シューティングゲーム、ヘッドフォンアクター。

そして、その対戦相手こそ彼女だった。

「……にしても、あの先生、よくここまでのプログラムを僅か数週間で完成させたわよね」

「そのかわり今日お休みだけだね……」

ヘッドフォンアクターの大半を担うプログラム作成はこの教室の担任、楯山研次郎によるものだった。

貴音は今、そのゲームのテストプレイを行っていた。

テストプレイだからそう時間をかけないように——貴音はそう思っていたが、思った以上にこのゲームは彼女のやっているゲームに近かったのか、どんどんのめり込んでいった。

「た、貴音……？ そのあたりでやめたほうが……」

「遙は黙ってて！」

「う、うん……」

遙は貴音にやめるよう求めたが、貴音の言葉に圧倒されてしまった。

——文化祭、その始まりの時間がすぐそばまで迫っていた。



「文化祭？」

「そう！ お父さんの学校で今日文化祭があるんだって。もちろん行くでしょ、シンタロー？」

ところ変わって、ここはとある家。

正確には如月伸太郎家の前。

ひとりの少女と少年が会話を交わしていた。

「……というか、どうして俺が文化祭に行かなくちゃならないんだよ」「いいでしょ、少しくらい」

シンタローは頭を掻いて、

「……解った、準備してくるから少し待ってろ」

そう言つて家の中に戻つていった。

それを見た少女——楯山文乃は小さく微笑んだ。

「うわああー。すごい人だねえ……」

「ほんとにな。どうしてここまで人が集まつてくるんだか……」

「もちろんそれは文化祭だからじゃない？」

アヤノは首を傾げる。対してシンタローの表情は固い。

「も、もう。シンタロー、こういうところ来たんだから少しは楽しもうって気持ちか……」

「ん？」

そこでシンタローはあるものに目がいった。

それはチラシだった。手作りのチラシにある言葉が書かれていた。

『シューティングゲーム、出来ますー!』

「シューティングゲーム、ね……」

シンタローは眩くと足早に駆け出す。

「ちよ、ちよつとシンタロー?! 早いよ!」

アヤノの言葉を聞かずに、シンタローはその場所へと向かった。

そして、

シンタローとアヤノはその場所へと辿りついた。

「いらつしやい。ここは——」

「シューティングゲームができるんだろ、知ってる」

長身の、どこか病弱に見える青年の言葉を押し切つて、シンタローは中に入った。

暗い部屋だった。人体模型が置かれていたり、水槽があるところを

見ると理科室のようでもあった。

そしてその部屋の真ん中にはテーブルが置かれていて、パソコンが二台設置されている。パソコンの画面には青を背景として不気味なその文字を浮かび上がらせていた。

— A h e a d p h o n e a c t o r

それを見て、シンタローはニヤリと笑い、一歩進み、その地に入っていた。

第九話 人造エネミーI

「ご主人？」

エネの言葉を聞いて、シンタローは漸く我に返った。長い長い夢をみているようだった。

「お、おう……エネ、どうした？」

「どうした、というのはこっちのほうですよご主人。まったくもって理解できませんよ。急にぼうつとして。熱中症でも早々に発症したのかと思いましたよ」

「そんな訳はねえ！ いくら引きこもっていたからとはいえ、だ！」

「だったらいいんですけど」

エネはそう言つてスマートフォンを強制的に切った。こんな茹だるような暑さでスマートフォンの電源を入れていれば、強制シャットダウンなんてことになりかねないからだろう。

しかし、それが可能なのは電脳空間を自由に動くことのできる身体を持つ、エネだからできる技でもある。

即ち。

生身の体のシンタローにはできるはずもないことであった。

「ちくしょう……早くデパートに……」

と、ふと思つたシンタロー。

「そういや、どうして俺外に出ることになつたんだ？」

そう。

実を言えば、彼が外に出る理由などまったくもって存在しない。

エネのいたずらに腹を立てたシンタローが、ただあてもなく飛び出ただけに過ぎないのだ。

「……何もすることないんだつたら、もう帰つたほうがいいんじゃない？」

そう呟いた、その時だった。

「やあやあそこのお兄さんっ」

猫なで声が聞こえて、恐る恐るシンタローは振り返る。

そこに居たのは黒いフードつきパーカーを着た男だった。ペー
ジユの髪に、猫目の男だった。身長はシンタローよりも幾分小さいく

らいだ。

「……俺に用か？」

「だってこのへん歩いているのは、今キミくらいしかいないでしょ」
「それもそうか。」

シンタローはそうも考えた。

猫目の男の話は続く。

「まあ、どうして僕が君のことを呼び止めたか、というとやっぱり理由があるわけでして」

「理由がない、とか言っていたら俺はすぐにここから消えていたよ」

「おお怖い。……まあ、単刀直入に言いますと、我々の組織に入りませんか？」

「……………は？」

組織。

今、猫目の男はそう言った。見た目からしてシンタローよりも年下に見えるが、『組織』という胡散臭い単語を聞くと、なぜだかシンタローはすぐにここから逃げたくなってくる。

「いま、逃げよう……そんなことを考えたでしょう？」

「お前、心が読めるとでも言うのか？」

「いや、それはどちらかというとセトの方かな。僕にはそんな『能力』からつきしだけど」

シンタローの中のセンサーが言っている。

こいつはヤバイ、と。

こんな胡散臭い連中に構っていると、何が起きるか解らない。そう思ったのかシンタローは踵を返そうとしたが、

「まあ、別にすぐに入って欲しい……ってわけじゃないよ。でも、いつかその日は訪れる。『あの世界』に関わりを持つ、その日が」

『あの世界』……………」

「ま、詳しくはこれを持ち帰ってね！」

そう言っただけで猫目の男は小さな紙を渡した。メールアドレスと電話番号があった。きつとその猫目の男のものなのだろう。

「……………名前だけ聞いてもいいか？」

「いいよ」

即答だった。

「僕の名前はカノ、鹿野修哉さ。ま、また近いうちに会えると思うけど」

そう言つてカノは手を振つて、その場を後にした。

第十話 透明アンサー

家に帰ってから、シンタローは作曲に再び取り掛かろうとした。しかし、まったく手につかなかった。やる気が出なかつたのだ。油断していれば、すぐあいつのことを思い出してしまふ——シンタローはそんな葛藤に襲われていたのだ。

「あ、あのー……主人？ どしたんです？」

エネが優しく声をかけるも、シンタローはそれを半ば無視する。

シンタローは再び、過去に戻る。

それは、シンタローと彼女の——ある思い出。



楯山文乃という少女は、お世辞にも頭がいいとは言えない学力だった。

そんなことなのに父親は高校の先生をやっているのだという。なんともおかしな話だ。

とはいえ、昔からの友人であるアヤノを、俺——如月伸太郎は放っておくことなんて出来なかつたのだ。

「なあ、アヤノ。お前どんだけ頭悪いんだ？ このxはここじゃなくて、ここに入れるんだ。そしてこれは二次方程式の解の公式を使うんだよ……」

「そんなこと言われてもわかんないよ……。もつと解りやすく教えてくれないかなあ」

「解りやすく……たつて、これでも精一杯だ。理解が足りないんじゃないのか？」

「ひどいなあ、シンタローは」

そう言つてアヤノは笑つた。

俺は気を取り直して、

「ほら、笑つてないで宿題やるぞ。これやらないと来年も三年生なんだろ？」

「うわー！ それは嫌だね！」

「だから頑張れ、って言ってるんだろが……」

俺は怒りを抑えながら、またアヤノに勉強を教え始めた。

アヤノの宿題が終わる頃には、もうすつかり夕方だった。

「……もうこんな時間か」

時計を見るともう六時を回っている。

アヤノは宿題が終わったのを自慢げに俺に見せてくる。しかしながら、その六割以上は俺が答えを教えたに等しいことを本人は覚えていないのだろうか？

まあ、いい。

そんなことはどうだっていい。

一先ず、俺は帰ろう。

「ごめんね、今日午後の授業ないのに手伝わせちゃって……」

玄関でアヤノはそう言って平謝りした。

「……別に。暇だったから手伝ってやっただけだ」

俺はそう答える。

対してアヤノは微笑みながら、俺の顔を見た。

「ほんとにありがとうね、シンタロー」

「……ほら、そんなことより帰るぞ。もう日が暮れちゃう」

そう言って俺はそそくさと靴を履いた。

「うん……そうだね」

アヤノは、そう頷いて俺の後ろをくつつくように歩き出した。

「ねえ、シンタロー。少し疲れているんじゃない？」

アヤノが、俺の隣に歩いているときにそう言った。

俺は「そうか？」と答えた。アヤノはさらにそれに続けて、

「うん。きつとそうだよ。目にもクマができています」

「それは昔からだ」

「あれ？ そうだっけ？」

「そうだ」

俺はアヤノの言葉を乱暴に返すと、さらに歩き出す。

「でも、ちゃんと食事とか取ってるの？」

何を唐突に。

「……ああ、とってるよ。別に、俺に構わなくていい」

「でもシンタローのことが心配なんだよ」

「うるさいな、どっかへいってくれよ！」

言ってしまった。

ものはずみで、俺はアヤノに言ってしまった。

でも、アヤノはそれでも微笑んで、

「行かないよ、だってシンタローのことが心配だし、シンタローとこうして歩いて帰りたいから」

そう言って、アヤノは俺の手を掴んだ。

第十一話 ロスタイムメモリーII

「五月蠅いな」

そうやって俺は、アヤノの手を払って少し前を歩いた。
アヤノはそのまま立ち止まっていたが、それでよかった。
それだけで、よかった。

◇◇◇

「ご主人？」

エネの声でシンタローは我に返った。

エネは溜息をついて、

「ご主人ったら、どうしてこうも何度もあれなんですかねえ？」

「……は？」

「だーかーらー、夢想病？ 夢遊病？ よく解らないですけど、それっぽい何かになっているといいますか？ どうしてかなーって自分でも思いませんか？」

エネという存在はこんなに苛立ちを覚えるものだっただろうか。

シンタローはふと思った。

「……お前には解らないだろうよ、そんな電子の身体でふわふわ浮いているお前にはな」

シンタローは呟く。

エネは頬をふくらませて、答える。

「……なんかその言葉すっごくむかつくんですけど」

「真実だろ」

「そうかもしれないですけど……」

シンタローは無造作に立ち上がった。

「あれ、どうしたんですかご主人。ご主人？」

その言葉。猫なで声。凡て、凡て気に入らなかった。

「ご……主人？」

それを終わらせる。

もうこの声を聞かないように。

「何を……」

シントローは、エネの声を聴ききる前にエネの首を掴んだ。

「ぐ、ぐ主人?!」

シントローは笑っていた。こんな状況にもかかわらず、笑っていたのだ。

「どうして……!」

シントローは答えない。

そしてシントローはエネの首にかける力を強めていく。

「……」

エネが静かになったのを見て、シントローはそれを放り捨てた。

漸く静かになった。うるさかったものが消えたのだ。

シントローはせいせいした。笑ってしまうほどだった。

「ああ……もう疲れた」

シントローは彼女に会いたかった。

シントローは彼女に会おうとした。

シントローはそのために、エネを殺して、彼女を選んだ。

シントローは――。

目の前にある、カッターナイフを手にとった。

そして、自らの首を躊躇なく切り裂いた。

シントローは声にならない声を上げて、その場に倒れこむ。喉を裂いたから、そこから血が流れ出る。それに息もできないから、とても苦しかった。

でも、シントローはこれでよかったのだ。

これでシントローはアヤノに出会える。

そう思ったのだ。

――目が見えなくなる

視界も暗くなり、そして――彼の意識はそこで途絶えた。



「——少年、見苦しいな。そこまでして、『あの子』に会いたいのか」
シンタローは暗闇に立っていた。

「何が言いたいんだよ」

「答えろ、少年」

どうやら質問している相手は、自分の質問に答えないと気がすまな
いらしい。

「……ああ、そうだ。俺はアヤノに会いたい。だから——」

「——死んだ、と?」

「さっきから何なんだあんたは——!」

シンタローは声が聞こえる背後を見るため、振り返った。

そこに居たのは——大きな蛇だった。

その大きさはシンタローの背の高さをゆうに超えるほどだった。

「なんだよ、これ……」

「私はあるときは『世界』、あるときは『少女』、あるときは『闇』……」

あるときは『蛇』とも呼ばれている。まあ、具体的に私の名前はついていない」

「名無し、ってことでいいんだな」

蛇は答えない。

「……じゃあ、お前は何でここに居る。というか、アヤノには会えないのか？　そして、そもそもここはどこだ」

「ここは位相空間で考えれば、負の値を取る空間だ。まあ、厳密に言う必要もないからざっくりと言え……この空間はどの世界にも該当しない空間だ。これでいいか」

「じゃあ何でお前はここにいる」

「お前を『ある世界』に入れる手引きをするためだ」

「手引き？」

シンタローは首を傾げる。

「そうだ。その世界は——いや、お前の『目』で確認すればいいだろう」

そう、蛇は溜息をついて、シンタローの目の前にまで近づいた。

「俺を食べるのか」

「違う。お前は別の世界へ行くだけだ。そして、私はその交通手段

……みたいなものだよ」

「……ああ、そうかい」

そして、蛇はシンタローを丸呑みにした。

最終章

第十二話 夕景イエスタデイⅢ

私、榎本貴音は最高に気分が悪い。最高に悪い、ってなんか矛盾しているような気もするけれど、そんなことはどうだっていい。

ともかく、今は。

この状態について、少し説明しなくてはならないだろう。

私たちは文化祭でシューティングゲームを行っていた。そして突然やってきた目つきの悪い男に「弱い」なんて呼ばれて私はけちよんけちよんに見返してやろう——そう思っていたら、負けた。

負けた、のだ。

「あー……別にいいから。景品は」

そう言つて。

少年はスタスタと歩いていく。

「きー！ むかつく！ 何あの『俺は全力出してないから』感！ むかつく！ むかつく！」

「貴音……そんな怒らないで……」

「怒るわあ!! 怒るに決まってるでしょうよあーいうの！ むしろあれでもまったく表情を変えることなく対応出来る遥の方がおかしい！」

「え、ええ……？ そうかなあ……」

「そうー！」

ズビシツ！ と指を遥の方に向ける。

遥はそれを聞いて悩んでしまっているらしい。ドギマギしている。

「とーにーかーく！ 続きやるぞー！ 絶対負けないっ!!」

私はここに、もう負けなことを誓うのだった。



「すごいね貴音！ ほんとに負けなかつたよー！」

「そ、そりゃ……女に二言はない、つか」

私はそのあと、本当に負けることはなかった。しかも危ない展開なんてなくて、全部余裕を持たせての勝利。まあ、ざつとこんなもんよ。……それにしてもほんとは貴音は強いなあ……。きつと僕が戦っても勝てないんだらうね」

「じゃあ、やってみる？」

「無理だつて！」

やんわりと拒否されてしまった。

ちえつ。

「そんなことより……そうだ！」

そう言つて。

遙はどこかから大量に持ってきたと思われる食べ物を私に見せる。

「これは？」

「これは、大量に余ったからつてもらったんだよ！ 美味しいよ」

「いいから食べるか話すかどっちにしよう……」

そう言つて私も食事に参加しようとした——その時だった。

遙が椅子から崩れ落ちた。

「は、遙?！」

私は急いで遙のもとに駆け寄るが——意識はない。

「ちよつと急すぎることになるが……まあ仕方ないな。これも大人の事情つてやつだ」

声が聞こえた。

その声の主を、私は知っている。

だが——、私はそこで急激な眠気に襲われた。

「嘘……どうして……」

ああ、神様なんですよ。

なんでこのタイミングで……！

私は神様を恨みながら、意識が——消えた。



浮かんでいた。

この匂いからして……ホルマリン？ たぶんそうだと思うんだけど、それに満たされた水槽に私は浮かんでいた。

「……目を覚ましたようだな」

声の主はそう言った。

「センセイ……これはいったいどういうつもりなんですか？」

私が訊ねると先生は笑った。

「ハハハ……まあ解んねえよなあ。たぶん俺が同じ立場でも解らねえと思うよ。けど、残念ながらそれを説明している時間がねえんだよ」

「それって……！ 遥は、遥は無事なんですよね!!」

「んん？ ああ、あいつも無事だよ。安心しろ。安心したか？ ……」

だったらさっさと死ねよ」

そう言つて、先生は手元にあつたレバーを引いた。

瞬間、私は息が出来なくなった。

どうして、どうして……!!

私が、何をしたというの……？

そして。

先生のニヒルな笑みを最後に、私は意識を失った。